

岡村昭彦没後25年「我々はどんな時代に生きているのか」 ロシア政治研究者鈴木博信氏の講演

第25回AKIHIKOの会開催



岡村昭彦没後25年にあたる今年、第25回AKIHIKOの会を滋賀県大津市で開催しました。テーマは「我々はどんな時代に生きているのか」。今回、なぜ大津で開催したのか。岡村昭彦は活動の拠点を生産の場（静岡県舞阪）に置き、そこから世界史や現代社会が矛盾を起している現場に出かけ、民衆の側から問題提起をしてきました。また昭彦の曾祖父は浜松藩の家老でしたが、大津の近くで代官をしていたことがあります。そして大津はロシア皇太子ニコライ暗殺未遂事件の起こった場所でもあります。そこでAKIHIKOの会を地方都市大津市で開催することにしたのです。

今回、特別講師として、ロシア政治研究の第一人者の鈴木博信氏をお招きしました。鈴木氏は一九六四年

岡村と同時期にベトナムでNHK特派員を務めた経験を有し、その後、ロシア政治の研究を続けてこられました。岡村からの信頼も篤く、岡村をして「超大国の一つであるソビエトを理解するには、鈴木博信が良き教師となる」（『岡村昭彦集』第6巻207頁）と言わしめるほどです。「ロシアのいま・ソ連のむかし」ロシア政治史のサイクル」という演題で、プーチン「メドヴェージェフ双頭体制について、ソ連からどのようにしてロシアが生まれたか？ プーチン体制はそこからどのようにして生まれたか？ 永年ロシア政治史を研究してきた鈴木氏ならではの興味深いお話をお聞きすることが出来ました。

今年は、節目ということで、没後十年でも演奏していた京都市在住のハーピスト池田千鶴子さんに講演に先立ち演奏をお願いしました。池田さんは、戦火後のサラエボで演奏されるなど、世界平和のために、各地でコンサート活動を続けておられます。今回はサラエボで演奏された曲のほか、数曲を演奏していただきました。心癒やされる一時でした。

また、岡村昭彦の会世話人の一人で、各地でアキヒコゼミを主宰する評論家の米沢慧氏から、「二〇一〇年のアキヒコ」と題して、岡村昭彦との出会いから今日までの経験を語っていただきました。詳しくは『シャッター以前』五号（35頁）もご覧ください。

さらに講演会に先立ち、精神を病んだ人々の権利尊重という視点から精神病院改革を実践している大津市「滋賀里病院」（栗本藤基院長）の取り組みの見学会を午前十時から催し、施設の案内だけでなく、入院患者との懇談の場もあり、熱心な意見交換がなされました。

第1部講演会参加は82名。第2部懇親会64名。

ロシアのいま、ソ連のむかし

鈴木博信

(国際政治研究者)



岡村さんと初めてお会いしたのは、私がNHK特派員としてベトナムに赴任した直後のことです。

私はそこで得た風土病がもとで一三年ほど臥床することになるのですが、岡村さんには一方的に愛していただいたとしかいいようがありません。折にふれて浜松の新鮮なノリやシラスをたずさえて見舞ってくださいました。「われわれはどんな時代に生きているのか」とつねに自問し、そ

の問いに「万巻の書を読み千里の道を行く」ことで自答しつつつけてこられた岡村さんのただただすごいお話に私は聞き惚れるばかりでした。正に生きた大学を出前して下さっていたのです。

そのころ耳にしたのが、『ついに世界史のしっぽを捕まえた』という本を、岩波新書で上・中・下、の三巻にして書き下すことになっているという話でした。

一般に近代は英国からはじまるといわれますが、英国を知るにはイギリス人が四〇〇年かけて支配下においた それだけ抵抗しぬいてきたアイルランドとの、またスコットランドとの抗争の歴史を知らずにはすませない、近代社会のしっぽはそこから掴まえていくのだ、と語ってくださる、目からうろこのおちる語りにはきこまれながら、私も『ついに世界史のしっぽを捕まえた』の出版をわくわくしながら待望した一人です。

残念ながらこの大作は未完のまま、岡村さんはあちらへ旅立ってしまった。

ちなみに封建時代と聞くと、日本ではおしなべて否定的な暗いイメージをもつ方がおおいとおもいますが、そこには幕藩体制を打倒して近代国家をつくった明治政府らしいの中央政府による国民むけマインド・コントロールが大いに利いているのではないのでしょうか。

ところが世界で封建制を経験したのは、ヨーロ

ッパと日本だけなんです。

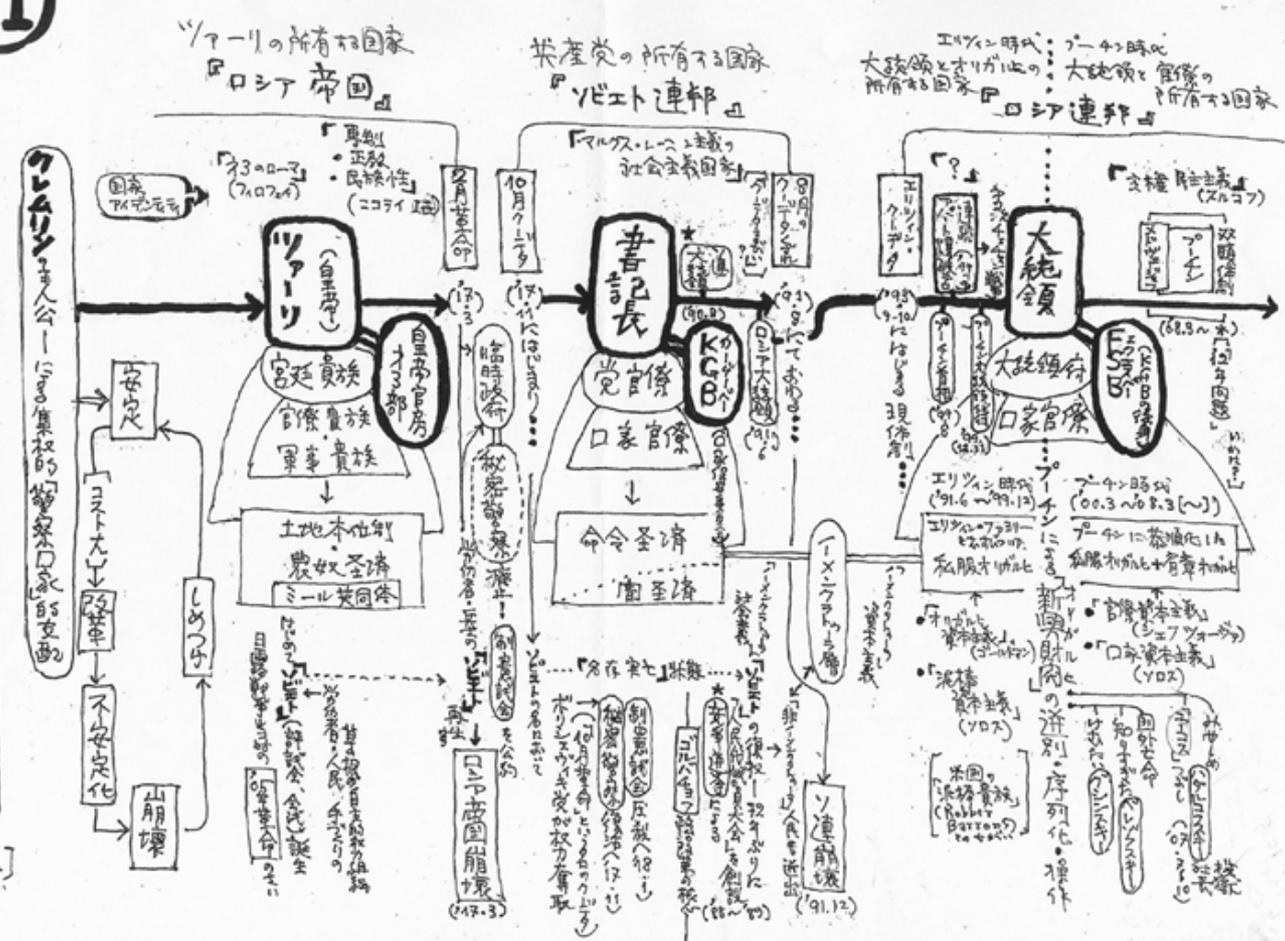
愛する妻子と一族が生きぬくための土台であるわが縄張り、「封土」を守るため、これを「安堵」し、「防衛」することに身体を張ってくれる主君をみつけれ、代償として武士・騎士の側もいのがけの労役・奉仕を主君に提供する。そうした「人と人」のとりむすぶ「私的・個人的関係」のつみ重なったものが封建制です。そんなところから信用や信義がぬきさしならぬ値打ちをもつ「自由都市」を生みだしたのも、封建社会だけなのです。資本主義も、そうしたカルチャーが生み出したそれは、一味ちがうといってよいでしょう。

人類史の老舗のような中国ですが、封建制は経験していません。その中国とユーラシア大陸を結びつけた世界最初の大帝國、ご存知のモンゴル帝國ですね。これが壊れ、枝分かれしたのがロシア帝國であり、中国の元帝國です。どちらもまったく封建時代を経験していない。インディアンを征服して「新世界」をつくった米國もまた、しかりです。

いずれは息子をともなつてモンゴルからロシアまで踏破する必要がある、と洩らされていた岡村さんのことです。凡人のおもいもおよばぬ発想でいまふれたあたりの問題を照らし出し、私たちのユーラシア大陸観を一新して下さいたのではないかと心のこりではありません。

参考1

ロシア政治史千年の「政治サイクル」



ソ連の素顔

さて岡村さんが投げかけつづけた「われわれはどんな時代に生きているか」という問いに照らし既成概念を振りすててすすむうえで、一九九一年に崩壊したソ連は恰好の一素材です。レジユメと一緒に若干の参考資料をお配りしましたが、参考資料1「ロシア政治史千年の「政治サイクル」」(別紙)の真中のところでお示していますように、「ソビエト連邦」というのは一九七一年の「一〇月クーデタ」から始まり、「一九九一年八月のクーデタくずれ」におわった国なのです。実は革命が始まったところが、「クーデタで始まりクーデタで終わった国、それがソ連の素顔なのだ」といい切れる時代に私たちは生き

ているのです。

むろん、「われこそは人類史を先導する高次の社会主義国家なり」と建国いらい胸を張っていた共産党時代のソ連が、そんなことをみとめるはずはありません。こどもたちにも、「一〇月社会主義大革命は世界史における新時代の始まりである。この革命の勝利によりロシア人民の歴史的運命を根底から変えると共に人類史も変える曙の時代」がはじまった(一九七四年の歴史教師向け指導要領)と教えこんできました。

だが、ゴルバチョフの改革で言論の自由が復活し、さらには一九九一年にソ連が崩壊するにおよんで、歴史解釈にも自由の花の咲くひとときがおよぎます。

ポリシエヴィキ、つまりのちの共産党は、権力をうばいとるため武装蜂起を計画していた。ロシア帝国崩壊後に成立した臨時政府を打倒する「一〇月クーデタ」は八月から準備されていた。一九九四年にモスクワで出された歴史教師用の「ロシア文明史」指導マニュアルは、そう明記しています。「ソ連の政治学が、人間による人間の搾取から人類を解放する新社会への道を開いたと規定してきた、いわゆる一〇月社会主義大革命のあと」、「実際にはロシア近代化の矛盾は新しい局面に入ったにすぎなかった。一〇月クーデタ

はロシア文明を深刻な危機に晒す解決法だった。結局、社会主義社会という名のもとに軍隊の役割が強化され、生産は軍事経済となった。宗教は廃止された。国家が全てを統制し、全市民を統制する全体主義が誕生した」。

指導マニユアルはつづけられます。「社会は宗教と手を切る一方、共同体の方向へと先祖返りして、レーニンは正義を行うよき皇帝ツァーラーということになった。これはまた新たな矛盾を生んだ。エリートと大衆の間の溝をなくすどころか、インテリからはリベラルな価値観を奪い、人民からは伝統的文化を奪った」。

しかし強い安定したロシアの復活をめざすプーチンが登場すると状況は一変し、歴史教育の自由放任時代はおわりです。プーチン自らが肩入れして二〇〇七年にまとめられた歴史教師むけの指導要領は、レーニン、スターリンのソ連を大きく肯定します。それは、旧社会のヒト・モノ・くびきのもろもろを一掃して、新しい時代を担う新しい管理者層を生み出した社会なのだ、と。そしてそうしたソ連社会をつくり上げたスターリンはたしかにおおくの問題を孕む指導者ではあるが、鉄血宰相とよばれたドイツ帝国のヒスマルク、容赦なく社会主義者や少数民族に血の弾圧を加える一方、強力な軍隊と鉄鋼業をもつ大國を築き上げたあのヒスマルク、と比較してもヨリ

悪い存在だとはとてもいえない、として冷酷無比の独裁者スターリンの功罪も見直すことを提唱しています。

前置きが長くなりましたが、レジユメにありますように、以下では、第一にプーチン「メドヴェージェフ双頭体制をどうつけとればよいか。

二番目には、来年はソ連崩壊二〇年になるわけですが、どのようにしてソ連が崩壊しそこからどのようにしてロシアが生まれたか。

三番目に、エリツィンのロシアからどのようにしてプーチン体制が生まれたか、の三つの点に絞ってお話できればとおもいます。

警察国家で締めつけると安定

一番目はプーチン「メドヴェージェフ双頭体制の位置づけです。

参考１の「ロシア政治史千年の“政治サイクル”」にもどっていただきますと、そのときどきのクレムリンの主人公を貫くようにして太い横線が走っています。そしてその横線のはじまるすぐ下のところに、“政治サイクル”の図式が示されています。

これでおわかりのとおり、ロシア帝国では皇帝ツァーラー、共産党が支配するソビエト連邦では共産党書記長、ロシア連邦では大統領、とよび名はかわ

ってもクレムリンに座る人物の手に徹底して権力を集中する警察国家的体制がとつたとき、ロシア政治は安定を経験してきたといえるのです。

ただし中央集権的警察国家をととのえて社会を締めつけ安定させるには、ぼう大な官僚群・秘密警察・軍隊といった金喰い虫の装置が必要ですから、平時でもはなはだコストがかかります。それを負担させられる人民大衆は従順をよそおい働いているフリをしながら、手抜き作業・やつつけ仕事をして生きのびようとつとめることになります。とうぜん生産はとどこおり税収はへり、コストが賄えなくなってきました。

ロシア史上の改革はかならず上からの改革です。締めつけたままでは下が働いてくれなくなるので、緩めざるをえなくなる。緩めると不安定化するのので締めつける。その再締めつけが利かないと一気に崩壊に向かい、「安定 改革 不安定 崩壊」というサイクルに入ってしまうのです。

国会を開設して皇帝独裁の手を緩めようとしたロシア帝国も、ソ連の建て直しペレストロイカに手をつけたゴルバチョフのソ連も、このサイクルにおちこんで崩壊しました。

ゴルバチョフのあとをおそったエリツィンのロシアでは、ソ連崩壊後のカオスから脱却したいという空気が充満してきます。カオスのなかで生きのびるのに疲れ果てた大衆は、なによりも安定

が欲しくなる。首尾よく資本家に変身できた上層の人間にとつても、手に入れた獲物をしっかりと確保していくことのできる安定したシステムが必要となるのです。

これをうけて法と秩序を回復し、中央集権的な警察国家へと先祖帰りをしてロシア社会に一応安定をもたらした、というのがブーチン時代の意味あいです。

ところがブーチンは二〇〇八年春、絶大な権限のある大統領の地位に自分より一三歳も若い弟分のメドヴェージェフを座らせ、自分は格下の首相につくという「双頭体制」をスタートさせました。クレムリンの主人公ひとり手に権力を集中させたときに体制が安定する、というロシアの政治史からいうと前例のない事態を選択したのです。

「新しいロシアは法治国家である。憲法を改正して大統領の三選を可能にするようなことは決してしない」と内外に胸を張って宣言してきたブーチンのことです。一期だけ側近中の側近にやらせておき、二〇一二年の大統領選挙のときにふたたび自分がトップに復活するために打ったウルトラCの一手にちがいない、とだれもがうけとりました。

メドヴェージェフを大統領候補に推薦したときの演説をみて、そこは露骨なほど、はっきりしています。「十七年以上、かれと一緒に仕事を

してきて……実務的で信頼できる個人的な関係があるからというわけでもない。ただかれは誠実でキチンとした、折り目正しい人物だから、任せることにしたのである。国民がかれを新大統領に選んでくれるなら、私はロシア政府首相として、大統領府と政府の権限を変えることなく、われわれの共通の仕事をにつける用意がある」。わが弟分にはリーダーシップがある、などは一言もいっていないのです。

そういえば、双頭体制がにり出したところに流行った一口話^{フネグドット}に、こんなのがあります。メドヴェージェフ大統領が夜おそく執務をおえて私邸に帰り寝室に入ると、ベッドにはスヴェトラナ夫人とならんでブーチン首相の顔……。おどろくメドヴェージェフにブーチンがあやまる。「すまん、すまん。ファースト・レディと寝る癖がついていてね」というものです。双頭体制にあってもブーチンが真の実力者であることにはかわりはないというわけです。

全メーカーが親方日の丸の国営企業だったソ連時代には、たとえば自動車工業省がトヨタやニッサンなどにあたるすべてのメーカーを仕切っており、ミサイルの製造はいわゆる中型機械省がうけもっていました。「首相」というのは、そうしたもろもろの経済関係の省庁の総とりまとめ役、いつてみればスーパー経団連会長といった存

在でした。首相を指揮し命令する上司はむろん共産党書記長でした。そして、泣く子もだまる秘密警察のKGB（「国家保安委員会」）、一般警察を統べる内務省、ソ連軍を統括する国防省といった腕力省庁や外交をうけもつ外務省等々はすべてソ連の真の所有者である共産党のトップ、党書記長に直属していました。とうぜんそれらの省庁のトップであるKGB長官・内務相・国防相・外務相は首相でなく党書記長に直属していたのです。

そういうソ連共産党書記長のもっていた巨大な権限をうけついたのでロシア大統領職です。共産党はまた研修施設や宿泊施設、印刷工場などを全国津々浦々にもっていました。それらも大統領府の資産管理局がそっくりうけついています。なので、大統領府はもろもろの業種をあわせもつロシア最大の不動産会社ともいえるわけで、モスクワで四つ星ホテルにすがたをかえて大統領府のために外貨をかせいでいる研修施設もめずらしくありません。

大統領職には、このように首相をはるかにしるぐ絶大な権限が付随しています。いかに忠実な弟分といえども、その気になればぬきんでた権力を行使しうる可能性があります。そんなことはブーチンは百も承知です。首相職につくことにきめるとすぐ、上下両院で絶対多数の議席を占めている「統一ロシア」党の党首に就任しました。ロシ

アの大統領は解任不可能というほど法律的に守られたポストですが、大統領の弾劾に必要な上下両院の4分の3以上の議席をこうして確保しているわけです。また、大統領府の要所々々には、プーチンの任命したプーチンと同じKGB育ちの同僚や後輩がそのまま座りつづけています。

ソ連時代に書記長直属のシンク・タンクとしてつくられたアメリカ・カナダ研究所の副所長をつい最近までつとめていたコルトウーノフ氏が昨秋話してくれたところによりますと、以上にわかって、エネルギー産業や宇宙・軍事産業もふくめロシアのハードウェア全体の八割方はプーチンがとり仕切り、のこり二割のうち各国首脳との折衝をはじめとするヒューマン・リソースの部分はメドヴェージェフがうけもつという、具体的な分野までとりきめてあるといえます。

もつとも大統領生活も二年をこえたメドヴェージェフです。あとにもふれるように、いささかの政治的野心を示しはじめたのもむりはありません。

話はずいぶん早ですが、「ソ連の崩壊は二〇世紀最大の痛恨事^{カラスノロフ}」といい切り「強いロシアの再興」を訴えるプーチンは、すでにふれたとおり、クレムリンの主人公におさまるや、上位下達の締めつけ体制を構築して中央集権的警察国家の再建をすすめました。

ロシアには米国の州や日本の都道府県にあたる自治体が自治共和国もふくめて八九ありますが、これを七つの特別管区に分けてそれぞれにクレムリンに直結する総督ともいうべき大統領特別代表をおき、ここに地域の秘密警察も直属させました。エリツィン時代によやく住民による選挙制が実現していた、自治体あたり二人ずつ選出の連邦会議^{上院}のメンバーも、実質的に大統領の任命制にひとしいものに変えてしまいました。

エリツィン時代にあいついで誕生した新興財閥は、操作し選別・序列化してクレムリンに恭順な存在にかえる一方、プーチンにとってけむたいグシンスキーやプーチンの出世に物心ともに貢献した知りすぎた男、ベレゾフスキーといった大物企業家は国外亡命に追いやりました。なかでも三〇代の若さでロシア最大の石油王となり、その富をつかってプーチンに対抗できる本物の野党をつくらうとしたハダルコフスキーは、クレムリンに挑戦したみせしめとして投獄され一〇年近い刑に服す羽目におちいつています。

国の混乱を鎮め安定させるには、まずクレムリンに独裁的権力を集中した警察国家を再興するのが先決とする政治伝統については、一九世紀ロシアの保守派を代表する政治思想家、カラムージンが明言しています。「ロシアは独裁体制に立つたときに安定する。この本質を無視した場合には

かならず混乱がくる」と。

ただし、過ぎたるは及ばざるがごとしの実例もあり、です。フランス革命のもたらした混乱を收拾するためとして王政復古を熱望したド・キユスチーヌ侯爵は、そのためのお手本にしようと、當時音に聞こえた独裁君主ニコライ一世をいただいていたロシアを視察に訪れ、ニコライ自身からも大いに歓迎されます。ところが帰国して侯爵があらわした『一八三九年のロシア』は、侯爵自身訪問まえには予想もなかった結論に達しています。「ロシアは聞きしにまさる独裁制であり、こんな国になってはいけない。とにかくロシア以外の国に生まれただけでもおおいに幸せというものだ。王政か共和制かを議論するまえに、そのことを確認するのが先決だ」というのです。

なぜロシアがそうなるのか、その理由を掘り下げるのはさておいて、ヨーロッパの大国ではあるもののロシアは特別だとうけとる「ロシア異質論」は、チャーチルのつぎのことばにみるように、いまも力を失っていないようです。チャーチルは、「ロシアは謎に包まれた謎の中の謎の国だ」といいのこしているのです。

クーデタくずれから生まれたロシア連邦

つぎに二番目の論点、どのようにしてソ連が崩

壊しどのようにしてロシアが生まれたか、に移りましょう。

冒頭にふれたように、一九一七年のクーデタでスタートしたソ連の息の根を止めたのは、一九九一年八月のクーデタくずれでした。ソ連の崩壊を食い止めようとして共産党の首脳部が打ったクーデタの失敗。あとでふれますように私自身はそれは本物のクーデタを意図したものでなく、始めから「みせかけのクーデタ」「クーデタまがい」にほかならなかったと理解してはいますが、きっかけにして事実上崩壊してしまいます。

形式上はそのあとしばらく時間をおいた九一年二月二五日が、ソビエト連邦の正式の命日です。

当時はまだソ連国会があつたわけですから、ソ連を解散するには国会で議決しなければなりません。が、跡目を狙ってクレムリン幕府のとりつづしを急ぐロシア藩主のエリツィンが、同じスラヴ民族「三家であるウクライナ藩、ベラルーシ藩の藩主たちと語らって二月はじめに解散を強行決議したのです。それはソ連憲法を無視した違法行為なのですが、米国や日本をはじめとするG7の国々や諸外国がこれをすんなり受け入れてしまったため、結局ソ連国会も既成事実を受け入れるよりほかありませんでした。

クレムリン幕府傘下の一五藩中の三つの雄藩がクレムリン幕府の諸法度を無視して解散のお

触れ書きを出し、これが国際的に認知されたのをたしかめたうえでクレムリンに乗り込んできたロシア藩主のエリツィンにたいし、さいこの將軍ゴルバチョフが核兵器発射の暗号コードを収めたスーツケースとクレムリン城を明けわたして去った日が、ソ連の正式の消滅日となるわけです。あとは経済も計画経済という名の命令経済から市場経済へと大転換して、ロシア型の資本主義が生まれてくるのです。

ここで一言だけ触れておきますと、貧富の格差のない天下をつくるのだといって天敵・資本主義を七〇年もバッシングし続けてきたソ連の、一体どこから現在の新興財閥をはじめとする資本家たちがやってきたのでしょうか？

一つは、国有企業の企業長、いわゆる「赤い支配人」やかれらを管理する上級官庁の官僚連中やその子弟といったエリート層が人脈や金脈を利用して国有企業をわがものにし、これを株式会社に切りかえてオーナーにおさまるケースです。先のハダルコフスキーもその一人といえます。もう一つは、闇経済を活動の場にしてきた人間が、これらエリート層とのコネを開拓することによって国有企業をせしめるケースで、グシンスキーやベレゾフスキーらはこちらに大別できるでしょう。

ソ連時代の選挙は、じつは「投票儀礼」にすぎ

ませんでした。投票用紙には地区の共産党がえらんだ、いわばひも付き候補の名が一人だけ前もって印刷されています。立会人のまえでそのまま投票すると賛成、反対したい場合の選択肢はカーテンのかげの机の所まで行き、用紙の上欄に×をかきこむことですが、あえてそうした人は企業でも学校でも長と名のつくポストには一生つけないでしょうし、海外旅行などは共産圏諸国であつてもとうていのぞめなくなるのです。

投票に出かけないだけでも不利な扱いを覚悟せねばならないうえ、これが勇気をふるって反対票を投じる代償でした。こうして九九%前後もの投票率、九九%を上まわる支持率が達成されるという茶番劇がくりかえされてきました。

こんな形ばかりの国会は最高会議が実権をもたせてもらえるはずはありません。共産党と政府が用意した法案に「賛成」「承認」のゴム判を押しただけの存在ですから、開会するのは一年間に数日止まりでした。

この茶番劇を演出する共産党自身は、といえ、一四あつたそれぞれに社会主義を名のる政党もふくめて他党は一切抹殺する一方、ソ連時代の最後の憲法6条にあるとおり、「ソ連共産党はソビエト社会を先導し指導していく勢力なり」と恭しく規定してあるだけで、一九一七年の一月クーデタで権力を握ってிரை、たとえば国民投票

に身をさらして国民の信を問うといった手続きは一度として許さないうたのです。乱暴ないい方をするならば、巨大な組織暴力団が暴力によって権力を奪って以来そのまま七〇年も居すわってきたのにひとしいとすら、いえるわけです。

教育水準も向上してくるなかでこれでは国民がしらせるのももつともだ。中央でたてた経済計画を中央から命令して実行させる「命令経済」もあまりにも非効率であり、市場経済の要素も導入して、国民にやる気を出してもらわないとソ連に未来はない。それには、本来のソビエトを復権させること、すなわち全国民の九四%を占める非共産党員のなかからも自由に立候補して議席をあらそうことのできる本来のソビエトを復活させ、国民に政治参加の大道を開く必要がある。ゴルバチョフがこう考えて、代議員には共産党の推薦がなくとも自由に立候補できることにして、選挙といえる選挙、競争的選挙を復活させたのが、一九八九年春に創設した「人民代議員大会」の眼目です。いいかえますと、ソビエト共産党、ソビエト連邦と名のつてはいるものの、じつさいには名のみのこつてソビエトの実質は「名存実亡」状態のものになつていて、といつこの長年のウソをふり払うほかはない、とゴルバチョフは決心したわけです。

そんなわけですので、「本来のソビエト」なる

ものを、ここでかけ足でふりかえっておく必要がありましよう。

二月革命こそ真の革命

一九一七年におきた二つの革命のうち、一〇月革命はじつは一〇月クーデタだったと申しましたが、これに先立つ三月、第一次大戦のさなかにおきた二月革命こそ真の革命といつてよいでしょう。太陽暦より一三日早いロシア暦使用当時の二月におきたところから「二月革命」とよばれる事態が、三〇〇年つづいたロマノフ王朝を倒し皇帝の専制支配に終止符を打ったのですが、それを達成した主役は労働者や兵士が寄り集まつてつくつた「ソビエト」（「評議会」「人民会議」。知恵を出しあつ「寄り合い」といふのが原義です）であり、これを支えにしてうごく「臨時政府」が生まれて帝政府は消滅したのです。

戦争反対をもとめるロシアの労働者の手でこのソビエトが最初につくられたのは、日露戦争当時の一九〇五年のこと、このときは弾圧されて短命におわりませんが、一九一七年に草の根の人民による手づくりの自治的権力機関として再生するのです。ペトログラートでもモスクワでも「パンをよこせ」「戦争はやめよう」と要求する労働者がソビエトをつくり、鎮庄に向かつた兵士たち

もこれに合流してしまします。ドイツ帝国軍を押しかえすため前線に出て指揮をとつていたニコライ二世は、「さらば朕自らが首都に戻つて鎮庄にあたる。列車を仕立てよ」と下命しますが、鉄道労働者もソビエトに同調してうごかない。かくなる上は詮方なし、とくすおれるようにしてニコライ二世が退位し、帝政ロシアがおわるわけです。草の根の労働者・兵士が主人公となつて自由に自治体レベルの運営にあたるこの「ソビエト」を支えにして、開明的な貴族、リベラルな教授や弁護士、穏健な社会主義者などでつくつた「臨時政府」は、自ら「臨時」と名のる、世にもまれな謙虚な政府でした。

「ロシア史上はじめてロシア全人民の手で選ぶ憲法制定議会を開き、そこでイギリス流の立憲君主制がいいかフランスのような共和制でいくか、ロシアの行くえを決めてもらう。われわれの使命はその時までしばし権力をおあずかりすることにつぎる」として、ロシア史上はじめて秘密警察を廃止し、政治犯はのこらず釈放し、とびきり自由で先進的な選挙法を公布していきます。

ロシア人は皇帝独裁体制から「世界一自由な国」（チューリヒの亡命先から急遽帰国したレーニンの形容です）へ、同時代の哲学者ベルジャーエフのいうとおり「極端から極端へ」とつごいたのです。

帰国したレーニンからみれば、権力を奪取するにははながつてもない状況でした。かれは「農民には土地を分配」「戦争は即刻中止」等のスローガンをかかげて首都ペトログラト・ソビエトの労働者・兵士の心をつかむと、ロシアの全権力は人民を代表するソビエトにつつすべきだという名目で、ためらうボリシェヴィキの同志たちの尻を蹴とばすようにしてクーデタをおこし、ソビエトの名において臨時政府を倒します。権力を握ったレーニンは「人民委員会議」と名のる新政府を発足させると、即座にKGBの前身となる秘密警察「チェカー」をつくります。反対分子とみれば裁判ぬきでその場で射殺できる権限を与えられた、ロシア史にもまれなこの冷酷な機関の誕生をもって、秘密警察のないロシアは一年とたたずにおわりを告げるのです。

ただしレーニンの新政権も、打倒した臨時政府が公約していた、ロシア史上はじめて全人民の手で直接えらぶ憲法制定議会の開催だけは、無視してとおるわけにいきませんでした。

そこでボリシェヴィキ政権は一九一七年末に制憲議会選挙を実施し、明けて一九一八年の一月には制憲議会を招集するのです。

首都ペトログラトのソビエトでは多数を占めていたものの、全ロシア人民によるこの制憲議会選挙ではボリシェヴィキの得票はわずか四分

の一にとどまり、四分の三は他党の占めるところとなります。文句なしの第一党になったのは、人口の九割を占める農民たち、かれらが生きてきた農村共同体の精神をふまえた農村社会主義の建設を主張する「社会革命党」でしたので、とうぜん制憲議会の議長にはエス・エル党のチエルノフ党首が選出されます。

こうして議長が議事に入ろうとしたところで、ボリシェヴィキが議場に入れておいた無政府主義者や街のならず者が、「人民の意志を代表するのはソビエトであって、この議会ではない」と叫んで議長席に殺到し、議場は收拾がつかなくなつたため、議長は止むなく閉会を宣言します。

翌日、議場にやってきた議員たちが見出したのは、議員らを閉め出すため機関銃をならべ議場の入り口にバリケードを張ったボリシェヴィキ支持の水兵たちのすがたでした。こうしてロシア史上はじめて全人民が参加して選出した歴史的な議会は一日で生命をおえるのです。

共産党はこのようにソビエトを利用して権力を獲得し維持したわけですが、いったん他党を抹殺しおわり一党独裁を確立する過程に入るや、ソビエトに結集してきた多様な労働者や兵士の要求すら強引に排除するようになり、たまりかねたクロンシュタット軍港の水兵集団　一〇月クーデタでも主役をつとめた、ペトログラト・ソ

ビエトの華でした　が「共産党のいない自主・独立のソビエトの再生」をアピールして立上ると、レーニンはこれも容赦なく弾圧し、あわせて党内でも一切の政策派閥や異論を禁止して、党を共産党独裁＝書記長独裁の組織にしてみまうのです。（スターリンがレーニン主義から逸脱した私生児であるところか、その嫡出児とすらいえる所以です。）

政治改革の果実はエリツィンの手に

さて本題にもどって、共産党のひもつきでない一般市民も原則自由に立候補ができ、複数の候補で争う競争的選挙、選挙の名に値する選挙を七〇年ぶりに復活させた「人民代議員大会」です。

その代議員二、二五〇人のうち、三分の一にあたる七五〇人だけはソ連国民が直接選出するのではなく、ソ連科学アカデミーや婦人同盟といった「社会団体」から選ばれる特別枠としてとり分けられ、ソ連共産党もここに党の中央委員だけでなく互選する一〇〇人の枠をもっていました。

ゴルバチョフ書記長はせっかくこんどの画期的な政治改革を生み出していながら、一九八九年三月に第一回の人民代議員大会が行われると、首都モスクワなり生まれ故郷南ロシアのスタヴロポリポリなりの選挙区で立候補して直接選挙に身

を晒し、対立候補に競り勝って代議員になるという道をとりませんでした。

共産党エリートのために設けた特別枠一〇〇人のリストに名前をのせて当選するという安全パイをえらんでしまい、民主革命の名実かねそなえた設計者として政治的栄光をまとうチャンスのがしたので。

この決断は、片やおなじ一九三一年に生まれ、入党した時期も二カ月ちがうだけといういわば同期の桜であるだけに、自分に先行してトップ・リーダーの座についたゴルバチョフにたいしてはげしい対抗意識を燃やしてきたエリツインが、ためらうことなく首都モスクワの選挙区で打って出て圧勝しただけに、なおのことあとまでひびく政治的失策でした。

ソ連崩壊の終幕をタテ系として貫くのは、いずれ劣らぬ強烈な個性の持ち主であるゴルバチョフとエリツインという二人の政治家のはげしい競り合い、権力闘争の絵柄です。

エリツインはゴルバチョフから首都モスクワの党第一書記という要職を任せられるや、これみよがしに市民の足メト口で通勤してみせ、水戸黄門よろしく商店の抜き打ち検査をして不正な横流しをみつけると関係者に厳罰を加えるという人気とり政治に打ちこみます。打ちこみすぎにくわえその他の暴走もたたってモスクワの党組織

から追い出されると、市民の側に立つたために特権のエリート層のいじめをつけた殉教者として立ちあらわれ、ゴルバチョフ民主改革をとらえて奇跡的といつていい復活をとげるのです。

一方、たとえば古都レニングラート（「レーニンの街」というこの名称は連邦解体後の一九九一年からサンクト・ペテルブルクという旧名にもどっています）地域では、選挙区選挙に打って出た共産党の大物政治家が、くつわをならべて落選するなど、各地で共産党組織が打撃をうけます。

そうした犠牲は覚悟の上で、「よくぞ勇気をもって民主改革にふみ切ってくれた」として、国民はゴルバチョフ書記長のひきいる新しい共産党の指導力に信頼を回復してくれるはずだと考えたゴルバチョフの期待はみならず、逆に党内にはゴルバチョフへの不信感が渦巻きます。

党改革の先輩であるフルシチョフ第一書記が、既得権益を守ろうとして党幹部が仕掛けた宮廷クーデタで失脚した二の舞だけは回避したい。そう考えるゴルバチョフ書記長は一九九〇年三月、ソ連憲法を改正して、「ソビエト連邦大統領」というポストを新設し、ソ連を世界標準の「法治国家」につくりかえるのだという謳い文句のもとに、権力の軸足を党から国家に移すことで生きのびを計りますが、「ここでもまた、からだを張って初代の大統領職に就く道は避ける」という政治的失策

を犯します。

すなわち、「ソ連大統領はソ連国民の直接選挙で選ばれる」と規定してあるというのに、初回は混乱を避けるための特別のケースだと理屈をつけて、全人民代議員大会の二、二五〇人によって選出してもらうという方法をとるのです。

この経過をみていた「政治動物」エリツインの嗅覚は的確でした。ゴルバチョフがソ連を手放さないなら、自分は一つ下のレベルのロシア連邦共和国を握ってゴルバチョフをゆさぶるのだときめ、ロシア連邦共和国の人民代議員大会の代議員、ついで議長におさまってロシア連邦共和国憲法を改正し一九九一年六月、新設した「ロシア共和国連邦大統領」の座に、全ロシア国民による直接選挙の洗礼をうけて就任するのです。人口ではソ連国民の二分の一、面積ではソ連の七〇%を占める巨大な領域の、史上はじめて民主的にえらばれたトップ・リーダーになったという政治的権威は、ゴルバチョフを脅かす強力な武器となりました。

ソ連をどこからみても恥ずかしくない「法治国家」にするというゴルバチョフの謳い文句をフルに活用すること、これが以上と平行してエリツインが繰り出した必殺パンチでした。

ソ連憲法は「連邦を構成する一五の共和国は主権国家であり、連邦から自由に脱退する権利をもつ」と明記しているのに、これまではすべてをソ

連共産党がとり仕切ってきた。だが、「法治国家である以上、憲法もその他もろもろの法律ももはや空証文ではない。こんごロシアのことはロシア自身が決めさせていただく、といい切った「主権宣言」を出す」と、エリツィンは、クレムリン幕府の予算の七割以上を賄ってきたロシア藩からの上納金をさし止め、これをみた他の共和国もこれに右へならへをはじめます。クレムリンにそっくり差し出してきたロシアのゆたかな資源も、もはや自動的に上納されることを止めました。

一挙に追いこまれた立場のゴルバチョフにとって、法律を尊重する以上、おもてむきのこされた道は、憲法の条文にあるとおり各共和国を完全な主権国家としてみとめ、連邦は主権国家間の調停役に徹するという、国連の事務局長にも似た組織へとおもい切って模様替えて生きのこりをはかるという道でした。

そこでゴルバチョフは、ソ連をそんなつましい新連邦につくりかえるという「新連邦条約」の交渉をエリツィンらと秘密裡にかさねた上で、一九九一年八月二〇日にその調印式をし、内容を天下に公表することになります。

調印式をひかえたゴルバチョフは、いまモスクワをはなれては危険だという側近の反対を押し切り、調印式での演説づくりに専念するためと称して、クリミア半島ヤルタの別荘へと飛び去ります。

当時のモスクワは、新連邦が発足すると、クレムリン幕府の重臣や旗本連中に大量の失業者^{ジョブレス}が発生することは必定とみたクレムリン幕府の老や老中たちが、新連邦の発足を阻止するクーデタを用意している、といううわさでもち切りでした。果せるかな、九一年八月一九日から二一日まで、ゴルバチョフをヤルタの別荘に幽閉し、エリツィンは身柄を拘束して新連邦の成立を流産させるという「世界をゆるがした三日間」のクーデタがはじまりますが、手ちがいが重なって腰くだけにおわり、これをきっかけにして連邦が事実上崩壊した、というのが定説です。

だが、それはそもそもクーデタを意図したものではありません。じつはなによりも西側にむけた「みせかけのクーデタ」「クーデタもどき」のパフォーマンスではなかったか、という仮説を私は捨てかねています。論より証拠、クーデタ側はモスクワに駐在する西側メディアには一切統制をくわえません。CNNをはじめとする西側のテレビは、刻々のうごきをライブで世界中に同時中継しつづけることができました。

エリツィンから上納金をさし止める兵糧攻め作戦を仕掛けられたゴルバチョフは、クーデタ前夜の七月にロンドンに飛び、ロンドンのG7首脳会議にあつまっていた米国のパパ・ブッシュ大統領らに、当面のつなぎ資金として二十億ドルでい

いから融資して欲しい、と懇願しますが、はつきりした返事は確保できませんでした。

ゴルバチョフも誇り高き政治家です。このまま新条約に調印してエリツィンに屈服するまえに、ひとつだけ残っていた選択肢にあらためて賭けてみる決心をしたのではないのでしょうか。一九八九年には東欧圏を平和裡に手放し、一九九〇年にはパパ・ブッシュ大統領とともに冷戦終結宣言をする、というふうにはソ連はすすんで手札を切り、西側とのビッグ・ディールに応じてきた。この辺りで西側も応分のお返しをしてくれてもいいはずだ。クーデタをみて西側首脳が目覚まし、「幽閉されているゴルバチョフを救え。クレムリンの金庫にむけた緊急援助にふみ切ろう」と決断してくれることを期待して、ゴルバチョフはみずから囚われ人になってみせたのではないのでしょうか。

結局G7からの資金援助はえられないままゴルバチョフの「クーデタもどき」は失敗におわり、連邦は解体してエリツィンのロシアがスタートすることはご存知のとおりですが、まもなくロシアをどんな方向にもっていくかをめぐって、エリツィン大統領と副大統領のルツコイ将軍らとのあいだに深刻な対立がもち上がります。

ロシア国会の多数の議員は副大統領側を支持し、エリツィン大統領の国会運営は行詰まりにお

ち入りますが、それを打開するために大統領の
つた手は、またしても武力クーデタでした。

ソ連時代から引きついだロシア憲法では、大統
領には人民の代表で構成する国会を解散する権
利をみとめていません。しかしエリツィン大統領
は一九九三年九月、憲法を無視して国会解散令を
出し、これに抵抗してロシア国会の建物に座りこ
んだ国会議員にたいし、一〇月、戦車を出動して
砲撃をくわえ、百数十人の死者を出して投降させ
た上、国会解散権をふくむ強大な権限を大統領に
みとめた現行の「エリツィン憲法」を成立させる
のです。

ソ連が「クーデタにはじまりクーデタで終わっ
た国」としますと、これを母体として生まれた口
シア連邦も、武力クーデタによって骨格をつくっ
たのです。

爆弾テロに自作自演のうたがいも

さいごに三番目の、プーチン体制がどのよう
にして生まれたかという点に入ります。

任期中五人も首相をとりかえてきたエリツィ
ン大統領が一九九九年八月、さいごの首相に選ん
だのはKGBの後身であるFSB(連邦保安局)
の長官に栄進していたプーチンです。このKGB
出身のもと諜報将校は、収賄と腐敗にまみれた工

リツィン一家を捜査の対象にとりあげようと
した検察官や大統領の政敵をあやしげな情報もた
めらうことなく駆使することによって葬り去り、
大統領の信頼をとりつけていたのです。

首相就任時の世論調査ではわずか二%の支持
率しか獲得できなかったプーチンですが、かれの
就任をまっていたかのように、九月に入ると、モ
スクワ市の二カ所を手はじめに四つの都市であ
わせて五カ所でロシアにとつての9・11ともい
うべきアパート連続爆破事件がおこり、プーチン
首相は即座に下手人はチェチェン共和国の武闘
独立派だと断定します。自分たちが実行したとき
にはかならず犯行声明を出してきたチェチェン
側は、沈黙したままでした。

エリツィン大統領のはじめた第一次チェチェ
ン戦争にはまったく消極的な反応しか示さない
できたロシアの国民感情も、こんどは一変してい
ます。こともあろうに首都モスクワの市民団地に
テロを働くとは許せない。断乎チェチェン人を討
伐して欲しい、の大合唱が湧きおこります。

そうした国民感情をふまえて一〇月、プーチン
は大軍を動員してチェチェンに向かわせます。第
二次チェチェン戦争のはじまりです。

テレビは、映画ランボーの主人公シルヴェスタ
ー・スタローンを小型にしたような、引き締まっ
た筋肉マンの中年男性であるプーチンを写し出

し、この人物こそロシア市民に安眠を確保して
くれる救国の英雄だとなえます。プーチンの支持
率は一気に七〇%をこえるのです。

ところで九九年九月九日の朝にモスクワのグ
リヤーノフ通りの集合住宅で爆破事件がおき死
者九四人、けが人一六四人の犠牲者を出したと
き、ちょうどモスクワに居あわせた私は現場に出
かけたのですが、現場の保存や検証にあたるべき
係員らしき関係者がごくまばらにしか見あたら
ず、はなはだ訝しいおもいに駆られたことをおも
い出します。

この事件をきっかけに集合住宅の爆破テロが
連続したのを見て、一部の勇気あるメディアに
は、プーチンに指示されたか、あるいはプーチン
人気をかき立てるための環境づくりを意図して
秘密警察が工作した事件ではないか、と推測する
論評も登場しました。

そうした疑惑をつよめた極めつけの事件が、九
月二二日にモスクワの東南およそ二〇〇キロの
リヤザン市の集合住宅で発生した、「大爆発」が
未然に防がれたという事件でした。三人の見しら
ぬ人間がアパートの地下に入りこみ白い粉の入
った袋を壁のあちこちに貼りつけているのをア
パートの住人がみつつけ、地元の警察に通報しま
す。爆破テロが連続しているため警戒を強めてい
た警察は爆発物の専門家をおくって探知機でた

しかめたところ、強力な時限爆弾であること、非常に特殊な軍用の爆薬が使われていること、が判明します。爆発物はうまく処理することなきを得るのですが、この事件は大きな話題になりました。

プーチンの親友でもある秘密警察・連邦保安局のバトル・シエフ長官が記者会見で、すました顔をして与えた説明は、「三人は爆発テロを防ぐための訓練をしていたにすぎない。白い物質は砂糖である（！）」というものでした。

そして一九九九年二月三日大晦日の夜、エリツィンは任期をのこしてとつぜん辞職を表明し、プーチンを大統領代行に指名します。プーチン大統領代行が翌日、新年に出した大統領令第一号は、当時モスクワ雀たちの間でもち切りになっていたエリツィン一家の腐敗・汚職の疑惑にピツタリ封印をかけるものでした。「エリツィン一家にたいする刑事訴追は一切おこなわない。一家についてはどんな疑惑も一切免責とする」というのです。

プーチン政権は爆破テロとチェチェン戦争をふまえて国民の支持を調達した上で、武力クーデタで土台をつくったエリツィン政権と取り引きをして成立したといえるのです。

おわりに一言

さきに、大統領職になじむにつれてメドヴェージェフがしだいに政治的野心をみせはじめた、と

申しあげました。そのため、二〇一二年春にめぐってくる次期の大統領選挙には双頭体制のどちらが立つのだろう、といういわゆる「二〇一二年問題」をめぐる論議が熱をおびています。

とくに昨年の秋、メドヴェージェフが「進め、ロシア！」と題してロシアの病状をきびしく診断した論文をサイトに発表し、ロシアは「立ち遅れ、かつ腐敗している。経済は石油やガスや原料資源に依存する原始的な状態のままだ。民主主義も非常に弱体だ」といい切りました。

これは自分に先立つプーチン時代の八年を正面から批判したにひとしい診断であり、とりもなおさず、「次も自分に任せてくれることが、治療の早道だ」というメッセージでもある。国家主義者のプーチンとリベラル派のメドヴェージェフの間にはあきらかに対立が生じている、と評する声が沸騰しました。

しかしこれは、プーチン戦略の幅をひろげ、ロシア内外のリベラル派の支持をとり込むためにとられている姿勢であって、いまのところメドヴェージェフは基本的にはプーチンの「ソフト・ヴァイス」役にとどまっている、と解することができます。

プーチンとメドヴェージェフがよって立つ基本戦略はあきらかです。そのキーワードは「技術的近代化」です。ナノテクノロジーをはじめとす

るもろもろの尖端技術と資本は西側から調達せざるをえないのが、ロシアの現状だ。したがって国際的には西側との協調をはかり、ロシア自身の開けるところはできるだけ開いて、強国になっていくための技術と資本をつまみ食いし、とりこんでいく、これが二人のよって立つ戦略的基盤といえるのです。

講師 鈴木博信(すずき・はくしん)氏の略歴

桃山学院大名誉教授(国際政治) ロシア政治

1934年 神戸市生まれ。東京大学教養学科を経て、同大学院国際関係修士修了。1959年 NHKに放送記者として入局し、アフリカ移動特派員(1963年)、サイゴン特派員(1964年)をつとめたあと「日本の条件」などの番組制作にも参加して退局し(1982年)、桃山学院大、関西学院大で教職につく。その間、サンクト・ペテルブルク大歴史学部客員研究員(1992年)、ハーヴァード大ロシア・ユーラシア研究センター客員研究員(1999年)。

著書：「自壊するアメリカ」(ちくま新書 2001)、「常識としての現代ソビエト学」(PHP、1985)、「超大国の不思議な関係」(「日本の条件」第5巻、NHK出版、1982)、「インドシナの底流」(NHK出版、1965)、「アフリカ」(同左、1964)など いずれも共著

訳書：「トルドマン」石油国家ロシア(日本経済新聞出版社、2010)、同「強奪されたロシア経済」(NHK出版、2003)、「アフトルハーノフ・ブレジネフの秘密」(サイマル、1981)、カー「ナポレオンからスターリンへ」(岩波現代選書、1984)、ウラム「膨脹と共存ソヴェト外交史」全3巻(サイマル、1979) 同年度 日本翻訳出版文化賞 など。

二〇一〇年のアキヒコ

米沢 慧
みねさわ けい

(評論家)



もし岡村昭彦が生きていたら今年八〇歳です。アキヒコが亡くなって二五年になります。実は年に一度はどきどきしながら見ている番組があります。彼が亡くなる半年前にNHKで放送された「訪問インタビュー」（一九八四年九月）で一回二〇分、四回放送分、合計八〇分のもです。「もう今年はお済みだろうか。彼のメッセージ

は届かないだろう」と思いながら、見てきたのですが、今年も又、アキヒコは現役の鋭い顔で睨みつけていました。二一世紀になっても死者からのことばになっていないし、未来を語る瞳は今日の状況を射抜きかつ失望していない。このしぶといアキヒコをまえに元気をもらい、簡単に老いるわけにはいかない、とおもえばかりです。

このたび最新の『シャッター以前』が出ました。計画的に出していたわけではないのですが、亡くなってから二五年、結果として五年に一度という感じで、第五号となりましたが、充実した内容になっています。

昨年はAKIHIKOの会にとっては大きなイベント参加がありました。名古屋で開催された日本死の臨床研究会年次大会（一月七日、八日）のシンポジウム『ホスピスへの遠い道』に栗本藤基、細野容子、一ノ坂保喜さんと出席。私は「戦場からホスピスへ 日本ホスピス運動黎明期と岡村昭彦」という話をさせていただきました。そして会場内に「アキヒコの部屋」を設け、戦争報道写真展と各地の岡村ゼミとホスピス関係資料展 静岡県立大学附属図書館岡村文庫にある彼の蔵書一万六千冊の中からホスピスに関する資料を一室に集めて展示をしました。当日集まった三〇〇〇人を前にしてアキヒコを檯舞台に出したという喜びをみんなと共有できたことは感慨ぶかいも

のになりました。

私のこころのうちでは「もうこれでいいや」というか、変な言い方ですが「もついのちも惜しくなくなつたな」、そんな想いがしました。

彼との出会いがなかったら、私の人生はまったく違っただろう。最近をよく人にも言うのですけど、いまの時代こういう男に出会うのは非常に難しいだろうと。

そういうおもいから、今回の『シャッター以前』では「体験的アキヒコ論」ということで、かつての編集者時代のみつともない自身の姿をさらしながら彼の「直覚力」の確かさがひきだせればと考えたのでした。誌面全体からは「岡村昭彦が歴史に入った。歴史研究の対象になった」ということだと思えます。そういう論文も多く掲載されています。

本日は鈴木博信先生の重厚なお話をいただいたあとですけど、AKIHIKOの会の余興というか、付録というような形で、二、三のことをお話してみたいと思います。

一九六五年四月三日の手紙

最初は、岡村昭彦が歴史研究の対象になったということに関して触れてみたいと思います。

ここに持参したのは、アキヒコがサイゴンから

日本のある女性に書いた手紙です。日付は一九六五年四月三日、横浜の齋藤博子さん宛のものです。実は私はこの手紙を大事に保管している齋藤さんから、過日預かり、彼女が私に「あなたが、これが何かの役に立ちそうだと思っなら公表していいわよ」と了解を得て、本日初めて皆さんに公開するのです。

齋藤博子さんは、作家山本周五郎の秘書で、作家の最期を看取った方です。山本周五郎は一九六七年に横浜の自宅で亡くなりますが、その亡くなるまでの晩年の三年間の日誌をきちつと残していました。その日誌が近くに公刊されることになったのです。（『閩門園日記（まかどえんにつき）

山本周五郎ご夫妻とともに』深夜叢書社 五月刊 一九〇〇円＋税）

山本周五郎に関する資料や日常生活等に関しては公開されたものがほとんどなく、今回の日誌の公開は最晩年の作品「ながい坂」から絶筆の「おごそかな湯き」まで、死を予感した作家の日常を記録したもので、きつと大きな話題を呼ぶと思います。その日誌にアキヒコについてふれた箇所があります。一九六五年一月二三日です。日誌では、ここ数日にわたって作家に口をきいてもらえないという状況です。

「先生がお怒りのわけは、冬休みにベトナム戦争直中のサイゴンに行きました。秋に出会った報

道写真家岡村昭彦さんに誘われてのことです」とあります。さらにこんなふうが続いています。

「三十五歳のカメラマンは不安になるほど輝いていました。親代わりの兄に熱く保護されて育ち世間知らずの二十七歳は呑み込まれてしまいました。当時のサイゴンは世界の報道人であふれ、週刊朝日の特派員として来ていた開高健さんにもお会いしました。

岡村さんの動きはあわただしく作戦の情報を得ると早朝暗い内にジープが迎えにきて前線へ取材にいけます。夜になると闇の向こうで砲声が鳴り響く状況でした。夜が明けると東洋のパリとうたわれサイゴンは忘れ得ぬ美しい街でした。物見遊山のつもりはなく、僧侶が焼身自殺をし、小学生がデモをする国のデモに参加したり日本大使館の日本語学校の教師と交流もしました。石川文洋さんもこの時初めてサイゴン入りした一人です。日本の平穏な暮らしとは裏腹に異常な刺激を体験しました。

サイゴンに留まることを求められ迷いましたが仕事を放棄することはできません。前線の取材中に置き手紙をして帰国しました。一月十五日のことです。」

その日録からおよそ三月半後に、齋藤博子さん宛に書かれたアキヒコの手紙です。これは間違いなく彼の文字です。

《いつもお心づくしのものをお送りいただいてありがと。昨四月二日夜から湯浅老人がサシミを僕の部屋に持参し、本四月三日から出掛ける大仕事の送別会をや（原文ママ）ってくれました。現在は午前五時。サイゴンの街はまだ暗く、自動車の音だけが例の家の窓から流れこんできます。六時になれば出発します。

今日は日本では文部省の芸術選奨の授賞式があるらしく、その日に今回のような仕事に出発するのは、ちょっと感慨深いものがあります。今度だけは生きて帰るのが非常に困難です。

でも黒衣の武士は出発しますよ。
あなたが置いていってくれたお金の返済について心配しています。もし日本に帰れたらすぐに連絡いたします。

どうか元気で、…体を大切にされますように。
ユキさん、とてもよく仕事を助けてくれてます。齋藤君、一九六五・四・三 from SAIGON AKIHIKO》

PANA通信のペーパーを使っています。PANA通信社の契約カメラマンとして、アキヒコは前年の一九六四年『LIFE』にデビューしてもっとも多忙な時期だったのでしよう。サイゴンでは、齋藤さんは私的な会話をする時間もなかった。アキヒコのアパートは、内外のジャーナリストがつねに群がっており、雑魚寝のような生活をしていた

1172. お心づきの物事、お送りの伝はりに、ありがとうございます。
 昨 4月2日夜は、湯浅老人が「サミと僕の部屋」に待参し、
 本 4月3日から出掛けた。大仕事の見物な事をやりました。
 現在は午前5時、サイゴンの街はまた暗く、自動車の音が
 例の窓から流れてきます。6時に夜は出立です。
 今日は日本では文藝省で芸術選奨の授賞式がおおしく、
 その日に、今回のような仕事に出発するのは、とても感慨深い
 ものがあります。今夜は、生きているのが、非常に困難です。
 以上、戦士の武士は出立です。
 おまたせ、星に¹¹⁷²くれたお金の返場に、心配にしています。
 以上、日本に帰るまで、直ぐに連絡いたします。
 どうぞ、元気で [] 体を大切にしてください。
 エキセン、とよく仕事と励みをお願いします。

斎藤 君

1965. 4. 3. From SAIGON

Abiko

Cable Address: PANANEWS

といます。
 彼女は現在七〇歳半ば。上野英信・晴子夫妻や
 岡部伊都子さんとの交流もあり、私も四〇年来付
 き合ってきたが「お墓までもっていったもし
 ようがないからね」と見せてもらったのです。
 皆さん、すでにおわかりと思います。四月三日
 出発するのは解放区のジャングルに入るとい
 ことです。『南ヴェトナム戦争従軍記』でいえば、

生活の末、ファットに二〇時間に及ぶインタビュー
 に成功し、そのスクープ内容は六月、『LIFE
 E』に掲載されるわけです。
 その出発の日が四月三日、日本では本人不在の
 芸術選奨授賞式当日だったというのです。文中の
 湯浅老人とあるのは、日本から行く人たちが、何
 かと面倒をみてもらっていたようで、私も写真を見
 せてもらったことがあります。文末に出てくる

彼は最初政府軍につ
 いていくわけですが、
 彼のあらたなテーマ
 は「一つの戦争をそ
 の両側から取材する
 こと」、つまり、南
 ヴェトナム民族解放
 戦線ファット副議長
 に会うために解放区
 ジャングルに潜入す
 る。

そして日本の新
 聞、テレビは「岡村
 昭彦は行方不明にな
 った」から死亡説ま
 でとびだしたわけで
 す。しかし、彼はそ
 の後五三日間の捕虜

「ユキさん」というのは、ベトナム人とのハー
 フで、日頃から情報提供などアキヒコに力を貸して
 いた人です。
 この手紙には、戦場取材に際してはいつも遺書
 を書いたというアキヒコの緊迫した取材前夜の様
 子が伝わってきます。

「でも、黒衣の武士は出発しますよ」

ところで、この手紙からはもうひとつ興味深い
 新鮮なことばに出合っています。「でも、黒衣の
 武士は行きますよ」というところです。「黒衣の
 武士（「アキヒコ）はいきますよ」、ここはアキ
 ヒコの面目躍如、とても含蓄のある魅力的な表現
 になっています。

この「黒衣の武士」というのは、むのたけじさ
 んと対談集『1968年』（三省堂刊）に出
 きますね。魯迅の『古事新篇』に登場する優秀な
 刀鍛冶の話（『剣を鍛える話』）で、肩間尺と黒
 衣の武士が出てくるんです。

国王にすごい剣を作れと依頼され、三年か四年
 かけて剣を作り、それを国王に渡すことになった
 刀鍛冶は、実は剣を二つ作るわけです。雄剣と雌
 剣。そして息子の肩間尺にこう言っただけです。「自
 分が剣（雄剣）を国王に持っていったら、必ずそれ
 で試し切りされて殺されるので、そのためにもう

「一つ剣(雌剣)を作った。その剣で仇を討て」と。それを実行しようとして眉間尺が返り討ちになりそうになったところで登場するのが黒衣の武士です。「おれが代わりに仇を討ってやる」というのです。

そここのころのやりとりがあります。眉間尺の「わたしの為に討ってくるのか、義侠の人」に対して黒衣の武士は「そういう呼び方は辱めるものだ」「では同情されて」「同情なんかでやるんじゃない」と黒衣の武士は言います。「おれはおまえのために討つ。それだけだ。おれの魂にはそれほど多くの傷がある。人が加えた傷と自分に加え



『ホスピス その理念と運動』共訳者佐藤蓉子(右)さんと

た傷とが」「それでは何をさしあげればいいのか」「おまえの持っている剣とおまえの首だ」。すると眉間尺は刀の上に自らの首をささとのせて黒衣の武士に差し出し黒衣の武士は王様を殺しに歌を歌いながら王城にむかうという挿話なんです。

要するに仇討ですが、背景としては当時の虐げられた民衆の怒りと苦悩と知恵、そういうものを受けとめ抱え込んでいる。そういう姿で登場するのが黒衣の武士です。

アキヒコはここで「今度だけは生きて帰ることが非常に困難です」といい、「でも、黒衣の武士は出発しますよ」と。

ちなみに、この黒衣の武士は王様のまえで「宴之傲者(えんしごうしゃ)と申す者」と名乗っているんです。この宴之傲者というのは、実は魯迅自身がペンネームにつかっていたものでした。

アキヒコは自身を魯迅と重ねただけではありません。もう一人、取材した解放戦線ファクト副議長その人にも実は「黒衣の武士」をみていたのです。

「同情は連帯を拒否する言葉だ」ということをアキヒコは遺していますが、このことはもまた「黒衣の武士のことは」だったのですね。

『1968年』の中で、アキヒコは民衆が権力に対抗する手段はなにかについて「うそをつくこ

と」「にげること」「うたぐること」。これが民衆の三大武器だといっています。そしてインテリというやつは民衆の珠玉のようなつそがわからない。なぜならそれだけ権力者に近いからだ、といっています。アキヒコが本多勝一の『戦場の村』を批判の餌食にした理由もそこにありました。朝日新聞に連載された当初の「戦争と民衆」の項には、「サイゴンの民衆はつそをつくから、外国人にはほんとうのことがよくわからない」という一節があったからでした。

これに関連して、一〇年ほど前に亡くなった武谷三男さんのアキヒコ評価を思い出しました。武谷さんといえば、ノーベル賞受賞者湯川秀樹の間子論の発展に協力した著名な物理学者、というより私には、戦後鶴見俊輔さんらと『思想の科学』を出し、とくに民主主義の本質にふれた発言、多数決を認めないやり方、少数意見つまり「どうでもいいや」という部分を切り捨てない、そういうところで徹底的にこだわり主張した思想家という存在でした。

武谷さんはAKIHIKOの会に何度か出席されましたが、わたしは帰り道が西武線沿線と同じ方向なので、二度ほど帰りに一緒したことがあります。ラビアンローズという老人ホームでなくなられた前年だったとおもいます。夜九時半過ぎで、電車にもあまりいないなか、「武谷先生は

岡村昭彦の「どこがいいですか」と聞きました。すると間髪をいれずに大きな声がかえってきたのです。怒るように「アキヒコ君は権力が何か、民衆とは何かということが分かってる人だ」と。そのことが非常に印象に残っていました。

昨年でしたか、鶴見俊輔さんの『悼詞』という、弔辞ばかりを集めた本とか、『言い残しておくこと』の本でも「武谷三男さんは原則的な人で、人をえらいとかえらくないでみない人」とありました。読みながら「なるほどなあ」と思ったのは、武谷さんは、権力に対して、ものすごい敵意をもっていた。たとえば戦後間もない時期の大学の存在を上昇志向の「特権としての学問」にすぎず、人間が生きていく上での学問の必要性から導いた「人権としての学問」が大事だという武谷さんの主張でした。

もう一つは、議論の好きな人でところかまわず徹底的に追いつめる人で、なかでも「こどもにうそをついていいと教えられるか」について一晩中の大議論を続けたというエピソードも登場しているほどでした。

「権力者のつく嘘はうその実害がひろく及ぶから追及しなくてはならないが、権力を持たないものにとって、うそはほとんどただひとつの身を守る方法であり、それを小学教育で、国家がとりあげてしまうのはまちがいだ」これが武谷さんの道



徳論の基礎だったと鶴見さんは語っています。

武谷さんはアキヒコを本当に気に入っていたんだなあというふうに思いました。

二〇一〇年のアキヒコ

アキヒコの問いかけは、いつも「人間はどこか

らきて、どこにいくのか」「我々はどんな時代に生きているのか」でした。そして、彼は「二世紀はいのちの時代である」と言い残して去ったのです。

『シャッター以前』5号でわたしは、彼とのかわりを出版編集者としての失敗の記録としてさらしましたが、没後は「いのちの時代二世紀」に橋渡ししなければならぬ編集者としての仕事にはこだわってきました。

幸い『ホスピスへの遠い道』を一九九九年に「定本」として刊行（春秋社）しました。関連して、一九八〇年の第一回の世界ホスピス大会の論文集翻訳書『ホスピスケア・ハンドブック』（一九八四年）についても、タイトルを、原題に戻して、今日もお見えになっていますけど、共訳者として関わった佐藤蓉子さんの協力をえて、あらたに『ホスピス』その理念と運動』（二〇〇六年・雲母書房）という形で出したわけです。これらの課題は、昨年の死の臨床研究会年次大会のシンポジウムへとつながりました。

さて、そんな直後の二〇一〇年にアキヒコの視点を重ねるとどうなるでしょうか。

すると、三〇数年前彼から最初に受けた宿題と重なっていることに気づいたのです。わたしが岡村さんから編集者失格の烙印を押されて、読めと突き出された本がダーウィンの『種の起源』。刊

行されたのは一八五九年。無知からくるわたしの躰きはこの本からだったのです。つまり、進化と死滅というまさに「いのち」の扉をひらいた地球生物との出会いだったということでした。

去年は『種の起源』出版一五〇年、ダーウイン生誕二〇〇年と重なっていました。病は進化ともにあること。わたしは膝を叩いて「そうか、本当にバカだなあ」と思いました。

書店には『種の起源』の新訳をはじめおびただしい関連出版物が並んでいました。

世界を揺るがした科学史上もっとも重要な発見のひとつ、生物が時間とともに変化するという「進化論」ですが、キリスト教社会に背いて研究を続けるほどダーウインを駆り立てたのはなんだったのか、『ダーウインが信じた道』（NHK出版）によると、ダーウインは奴隷制への反対と人類の兄弟愛を訴えてきた一族に生まれ、ビーグル号航海で直接奴隷制の残酷さに衝撃を受けたからとあります。意外な論旨ですがイギリスでは一八三三年に、アメリカでは南北戦争後の一八六五年に奴隷制は廃止になりますが、ダーウインはリンカーンの奴隷解放宣言を「甘い」と批判しています。また、ダーウインといえば『種の起源』ですが、その後に『人間の由来』（一八七一年）という本を出しています。この中で「人間が一番偉いのではない。人間はどこからきてどこに行くのか」と

うことの中に、生命進化の名残を全部抱え込んでいる。従って、そこには差別はない」ということを言っています。

さらに、おもしろいことにダーウインとリンカーンは一八〇九年生まれで誕生日も同じでした。この事実発見は、すぐにもアキヒコにビッグニュースとして知らせたい衝動にかられたほどでした。というのも、岡村さんは彼らと同時代に生きていたら、まさきにダーウインを取材しただろう、またリンカーンの声はなんとしてもナマで聴きたいともいつていたからです。

もうひとつ付け加えてみたいことがあります。いまの裁判員制度のことです。この一年ほど、裁判員の人たちの判決事例には被告人に対する市民意識の深さが加味されているようで好感がもたれています。そこには和解、償い、救済に共感の眼差しが活かされているようにみえます。

しかし、凶悪犯罪に伴う量刑として死刑が残っているということ。死刑制度を問わないで、つまり死刑の存続をベースにした裁判員制度は必ずや国家権力の視線に加担する通路になるのではないかと考えます。

最近の内閣府の世論調査では死刑を容認するという人が八五%を超えています。容認派に理由を尋ねると、廃止すれば被害者やその家族の気持ち

がおさまらない、凶悪犯罪はいのちで償うべき、廃止すれば凶悪犯罪が増える、と続いています。また、将来も死刑を廃止しないと答えた人は六割ほどです。国家的理念としてはどうなのか。国連規約人権委員会の「世論に関係なく廃止を検討すべき」という勧告にも政府は世論の支持を根拠にして死刑存続の姿勢を崩していません。

一方で、死刑廃止を前提に加盟国を選別しているEU諸国があります。それは近代史の暗い体験からの脱出の契機として、良心の手探りから導いてきたものです。

かつて金婚老裁判で、あえて「民衆弁護士」と称して証言台に立ったアキヒコなら、どんなことばで風穴を開けるでしょうか。

米沢憲（よねざわ・けい）氏の略歴

評論家 大東文化大学環境創造学部非常勤講師。岡村昭彦の会世話人。1942年生まれ。島根県出身。早稲田大学教育学部卒。出版編集者として岡村昭彦と出会う。没後岡村昭彦報道写真集（講談社）を編集。現在、AKIHIKOゼミをはじめ、看護医療 生命を考えるセミナーを各地で主宰。著書に都市の貌、住むという思想『新ホスピス宣言』病院化社会をいきる『ホスピスという力』遺りのいのちを支える『幸せに死ぬということ』など多数。近著に在宅ホスピス医内藤いつみ氏との往復書簡 いのちのレスパイト（雲母書房）。

事務局便り

1. 「シャッター以前」 5号刊行

* 2010年2月発行 定価1050円

* 申込みは事務局まで

* 会員の皆様のカンパにより印刷代の支払い送料などの支出清算ができました。ありがとうございました。

2. この一年間に開催された写真展・シンポジウム・資料展示

静岡県立大岡村文庫と文書研究会による写真展&資料展示

期間：09年10月31日(土)～11月5日(木)

会場：静岡市駿河区谷田静岡県立大学内

「第33回日本死の臨床研究会」にてシンポジウム「マザー・エイケンヘッドと岡村昭彦を語る」と「アキヒコの部屋」開催。

期間：09年11月7日(土)～8日(日)

会場：名古屋国際会議場&211展示室

* シンポジウム・同国際会議場センターホール
出演者(米沢慧さん、細野容子さん、栗本藤基さん、二ノ坂保喜さん)。



* 「アキヒコの部屋」では写真展、プチ・アキヒコゼミ(ゲスト：山崎章郎・内藤いづみさん)と共に静岡県立大学岡村文庫・文書研究会による「ホスピスへの遠い道」関係資料展示や各地の岡村ゼミの展示が行われた。「アキヒコの部屋」訪問者数約1000名。

「大和・生と死を考える会」17周年記念講演会

「戦場からホスピスへ歩んだ岡村昭彦」と写真展・「ホスピスへの遠い道」資料展示

期間：10年5月16日

会場：神奈川県大和市生涯学習センター



3. AKIHIKOの会ホームページで

「アキヒコ回想手帖」連載開始

暮尾淳さんが「シャッター以前」で連載をしている「アキヒコ回想手帖3」が7月HPにUPされます。随時連載予定。乞うご期待!

4 『定本・ホスピスへの遠い道』(第2刷)

* 2009年9月発行 定価3200円+税

* 申込みは事務局まで

5. その後の「アキヒコ・オカムラ」資料編

2009年

6. 27週刊『東洋経済』書評「私とマリオ・

ジャコモツリ」中川道夫

7. 31新耀社『1968(下)反乱の終焉とその遺産』小熊英二著

8. 『選択』8月号「選りのいのち選りの医療」米沢慧

9. 『死の臨床』9月号No.82No.2 第33回日本死の臨床研究会プログラム・予稿集

9. 30 春秋社『ホスピスへの遠い道』(第2刷)岡村昭彦著

10. 20 雲母書房『往復書簡 いのちのレス』内藤いづみ 米沢慧著

12. 1 自費出版『最後つ屁』小林金三著
2010年

1. 『緩和ケア』1月号No.20No.12010 第33回日本死の臨床研究会報告 大井祐子

酒井若子
2. 24 『シャッター以前』5号

2. 24 岩波書店『上海双世紀1979-2009』
中川道夫

『岡村昭彦の会』会報第二〇号(2010.7.17)

発行 東京都江戸川区西小岩五 十一 二十七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL/FAX 03 3657 8380

* ホームページ <http://akihiko.kazekusa.jp/>

* メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusa.jp